



日本文学全集

7

森 鷗外

雁・斗タ・セクスアリス・青年・舞姫・半日
山椒大夫・高瀬舟・寒山拾得・他

河出書房

森 鷗 外



カラー版日本文学全集 7

1969©

昭和四十四年三月二十日 初版印刷
昭和四十四年三月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者 森 鷗 外

発行者 中 島 隆 之

印刷者 草 刈 竜 平

装幀者 亀 倉 雄 策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話・東京(292)三七一一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

森 鷗外

雁		7
キタ・セクスアリス		10
青 年		11
舞 姫		14
うたかたの記		15
文 づ か ひ		16
花 子		18
沈黙の塔		19
半 日		20
あ そ び		22

妄 想	二二四
百 物 語	二二四
興津弥五右衛門の遺書	二二〇
阿部一族	二四七
佐橋甚五郎	二六四
安井夫人	二六八
山椒大夫	二七四
魚 玄 機	二九二
ちいさんばあさん	二九六
高 瀬 舟	三〇四
最後の一句	三〇八
梶 原 品	三一五
寒山拾得	三二〇

注	年	解	巻頭写真	色刷挿画	
釈	譜	説	真		
紅野敏郎	長谷川泉	榊原和夫	山口蓬春	榎戸庄衛	岩田正巳
三六	三三	三三			

雁・キダ・セツ
スアリス
舞姫・文づかひ
・妄想
・青年・阿部一高族
・山・榎
・山・寒山拾得

森

鷗

外

古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出来事だと云うことを記憶している。どうして年をはっきり覚えていられるかと云うと、その頃は東京大学の鉄門の真向いにあった、上条と云う下宿屋に、この話の主人公と壁一つ隔てた隣同士になって住んでいたからである。その上条が明治十四年に自火で焼けた時、僕も焼け出された一人であった。その火事のあった前年の出来事だと云うことを、僕は覚えていからである。

上条に下宿しているものは大抵医科大学の学生ばかりで、その外は大学の附属病院に通う患者なんぞであった。大抵どの下宿屋にも特別に幅を利かせている客があるもので、そう云う客は第一金廻りが好く、小気が利いていて、お上さんが箱火鉢を控えて据わっている前の廊下を通るときは、きつと声を掛ける。時々はその箱火鉢の向側にしやがんで、世間話の一つもする。部屋で酒盛をして、わざわざ肴を拵えさせたり何かして、お上さんに面倒を見させ、我儘をするようである、実は帳場に得のつくようにする。まずざつと云う性の男が尊敬を受け、それに乗じて威福を擅にすると云うのが常である。しかるに上条で幅を利かせている、僕の壁隣の男はすこぶる趣を殊にしていた。

この男は岡田と云う学生で、僕より一学年若いのだから、とにかく

もう卒業に手が届いていた。岡田がどんな男だと云うことを説明するには、その手近な、際立った性質から語り始めなくてはならない。それは美男だと云うことである。色の蒼い、ひよろひよろした美男ではない。血色が好くて、体格ががっしりしていた。僕はあんな顔の男を見たことがほとんどない。しいて求めれば、大分あの頃から後になって、僕は青年時代の川上眉山と心安くなった。あのとうとう窮境に陥って悲惨の最期を遂げた文士の川上である。あれの青年時代が一寸岡田に似ていた。もっとも当時競漕の選手になっていた岡田は、体格では遙かに川上なんぞに優っていたのである。

容貌はその持主を何人にも推薦する。しかしそればかりでは下宿屋で幅を利かすことは出来ない。そこで性行はどうかと云うと、僕は当時岡田ほど均衡を保った書生生活をしている男は少かるうと思っていた。学期ごとに試験の点数を争って、特待生を狙う勉強家ではない。遣るだけの事をちゃんと遣って、級の上位より下には下らずに進んで来た。遊ぶ時間はきまって遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時前には間違ひなく帰る。日曜日には舟を漕ぎに行くか、そうでないときは遠足をする。競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでいるとか、暑中休暇に故郷に帰るとかの外は、壁隣の部屋に主人のいる時刻と、留守になっている時刻とが狂わない。誰でも時計を号砲に合せることを忘れた時には岡田の部屋へ問いに行く。上条の帳場の時計も折々岡田の懐中時計に拠って匡されるのである。周囲の人の心には、久しくこの男の行動を見ていればいるほど、あれは信頼すべき男だと云う感じが強くなる。上条のお上さんがお世辞を言わない、破格な金遣いをしていない岡田を褒め始めたのは、この信頼に本づいている。それには月々の勘定をきちんとすると云う事実が手かつて力あるのは、ことわるまでもない。

「岡田さんを御覧なさい」と云う詞が、しばしばお上さんの口から出る。

「どうせ僕は岡田君のようなわけには行かないさ」と先を越して云う

学生がある。かくのごとくにして岡田はいつとなく上条の標準的下宿人になったのである。

岡田の日々の散歩は大抵道筋がきまっていた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川のお齒黒のような水の流れ込む不忍の池の北側を廻って、上野の山をぶらつく。それから松源や雁鍋のある広小路、狭い賑やかな仲町を通って、湯島天神の社内に這入って、陰気な臭橋寺の角を曲がって帰る。しかし仲町を右へ折れて、無縁坂から帰ることもある。

これが一つの道筋である。或る時は大学の中を抜けて赤門に出る。鉄門は早く鎖されるので、患者の出入りする長屋門から這入って抜けるのである。後にその頃の長屋門が取り払われたので、今春木町から衝き当るところにある、あの新しい黒い門が出来たのである。赤門を出てから本郷通りを歩いて、栗餅の曲橋をしている店の前を通って、神田明神の境内に這入る。そのころまで目新しかった目金橋へ降りて、柳原の片側町を少し歩く。それからお成道へ戻って、狭い西側の横町のどれかを穿って、矢張臭橋寺の前に出る。これが一つの道筋である。これより外の道筋はめったに歩かない。

この散歩の途中で、岡田が何をすると云うと、ちよいちよい古本屋の店を覗いて歩く位のものであった。上野広小路と仲町との古本屋は、その頃のが今も二三軒残っている。お成道にも当時その儘の店がある。柳原のは全く廃絶してしまった。本郷通のはほとんど皆場所も持主も代っている。岡田が赤門から出て右へ曲ることのめったにないのは、一体森川町は町幅も狭く、窮屈なところであったからでもあるが、当時古本屋が西側に一軒しかなかったのも一つの理由であった。

岡田が古本屋を覗くのは、今の詞で云えば、文学趣味があるからであった。しかしまだ新しい小説や脚本は出ていぬし、抒情詩では子規の俳句や、鉄幹の歌の生れぬ先であったから、誰でも唐紙に摺った花月新誌や白紙に摺った桂林一枝のような雑誌を読んで、槐南、夢香なんぞの香奩体の詩を最も気の利いた物だと思ふ位の事であった。僕も花月新誌の愛読者であったから、記憶している。西洋小説の翻訳と云

うものは、あの雑誌が始めて出したのである。なんでも西洋の或る大学の学生が、帰省する途中で殺される話で、それを談話体に訳した人は神田孝平さんであったと思う。それが僕の西洋小説と云うものを読んだ始であったようだ。そう云う時代だから、岡田の文学趣味も漢学者が新しい世間の出来事を詩文に書いたのを、面白がって読む位に過ぎなかったのである。

僕は人附合いの余り好くはない性であったから、学校の構内でよく逢う人にも、用事がなくては話をしない。同じ下宿屋にいる学生なんぞには、帽を脱いで礼をするようなことも少かった。それが岡田と少し心安くなったのは、古本屋が媒なしたのである。僕の散歩に歩く道筋は、岡田のようにきまっていなかったが、脚が達者で縦横に本郷から下谷、神田を掛けて歩いて、古本屋があれば足を止めて見る。そう云う時に、度々岡田と店先で落ち合う。「好く古本屋で出くわすじゃないか」と云うような事を、どっちからか言い出したのが、親しげに物を言った始である。

その頃神田明神前の坂を降りた曲角に、鉤なりに縁台を出して、古本を曝している店があった。そこで或る時僕が唐本金の金瓶梅を見つけて値を問うと、七円だと云った。五円に負けてくれと云うと、「先刻岡田さんが六円なら買うと仰やいましたがおことわり申したので」と云う。偶然僕は工面が良かったので言値で買った。二三日立ってから、岡田に逢うと、向うからこう云い出した。

「君はひどい人だね。僕が折角見つけておいた金瓶梅を買ってしまったじゃないか。」

「そうそう君が値をつけて折り合わなかったと、本屋が云っていたよ。君欲しいのなら譲って上げよう。」

「なに。隣だから君の説んだ跡を貸して貰えば好いさ。」

僕は喜んで承諾した。こんな風で、今まで長い間壁隣に住まいながら、交際せずにいた岡田と僕とは、往ったり来たりするようになったのである。

式

その頃から無縁坂の南側は岩崎の邸であつたが、まだ今のような巍巍たる土塀で囲つてはなかつた。きたない石垣が築いてあつて、苔蒸した石と石との間から、齒菜や杉葉が覗いていた。あの石垣の上あたりは平地だか、それとも小山のようにでもなっているか、岩崎の邸の中に這入って見たことのない僕は、今でも知らないが、とにかく當時は石垣の上の所に、雑木が生えたいほど生えて、育ちたいほど育っているのが、往来から根まで見えていて、その根に茂っている草もめつたに刈られることがなかつた。

坂の北側はけちな家が軒を並べていて、一番体裁の好いのが、板塀を繞らした、小さいもた屋、その外は手職をする男なんぞの住いであつた。店は荒物屋に烟草屋位しなかつた。中に往来の人の目につくのは、裁縫を教えている女の家で、昼間は格子窓の内に大勢の娘が集まつて為事をしていた。時候が好くて、窓を明けているときは、我々学生が通ると、いつもべちゃくちや盛んにしゃべっている娘どもが、皆顔を挙げて往来の方を見る。そして又話をし続けたり、笑ったりする。その隣に一軒格子戸を綺麗に拭き入れて、上がり口の叩きに、御影石を塗り込んだ上へ、折々夕方に通つて見ると、打水のしてある家があつた。寒い時は障子が締めてある。暑い時は竹簾が卸してある。そして為立物師の家の賑やかなために、この家はいつも際立ってひっそりしているように思われた。

この話の出来事であつた年の九月頃、岡田は郷里から帰つて間もなく、夕食後に例の散歩に出て、加州の御殿の古い建物に、仮に解剖室が置いてあるあたりを過ぎて、ぶらぶら無縁坂を降り掛かると、偶然一人の湯帰りの女がかの為立物師の隣の、寂しい家に這入るのを見た。もう時候が大ぶ秋らしくなつて、人が涼みにも出ぬ頃なので、一時人通りの絶えた坂道へ岡田が通り掛かると、丁度今例の寂しい家の格子戸の前まで帰つて、戸を明けようとしていた女が、岡田の下駄の

音を聞いて、ふいと格子に掛けた手を停めて、振り返つて岡田と顔を合せてたのである。

紺縮の單物に、黒襦子と茶献上との腹合せの帯を締めて、織い左の手に手拭や石鹵箱やら糠袋やら海綿やらを、細かに編んだ竹の籠に入れたのを解げに持つて、右の手を格子に掛けた儘振り返つた女の姿が、岡田には別に深い印象をも与えなかつた。しかし結い立ての銀杏返しの髪が蟬の羽のように薄いのと、鼻の高い、細長い、やや寂しい顔が、どこの加減か顔から頬に掛けて少し扁たいような感じをさせるのが目に留まつた。岡田はただそれだけの刹那の知覚を閲歴したと云うに過ぎなかつたので、無縁坂を降りてしまふ頃には、もう女の事は綺麗に忘れていた。

しかし二日ばかり立つてから、岡田は又無縁坂の方へ向いて出掛けて、例の格子戸の家の前近く来た時、先きの日の湯帰りの女の事が、突然記憶の底から意識の表面に浮き出したので、その家の方を一寸見た。堅に竹を打ちつけて、横に二段ばかり細く削つた木を渡して、それを蔓で巻いた肱掛窓がある。その窓の障子が一尺ばかり明いていて、卵の殻を伏せた万年青の鉢が見えている。こんな事を、幾分かの注意を払つて見たために、歩調が少し緩くなって、家の真ん前に来掛かるまでに、数秒時間の余裕を生じた。

そして丁度真ん前に来た時に、意外にも万年青の鉢の上の、今まで鼠色の闇に鎖ざれていた背景から、白い顔が浮き出した。しかもその顔が岡田を見て微笑んでいるのであつた。

それからは岡田が散歩に出て、この家の前を通る度に、女の顔を見ぬことはほとんど無い。岡田の空想の領分に折々この女が闖入して来て、次第に我物顔に立ち振舞うようになる。女は自分の通るのを待つてゐるのだろうか、それともなんの意味もなく外を見ているので、偶然自分と顔を合せることになるのだろうかと云う疑問が起る。そこで湯帰りの女を見た日より前に、溯つて、あの家の窓から女が顔を出していたことがあつたか、どうかと思つて考えて見るが、無縁坂の片側

町で一番騒がしい為立物師の家の隣は、いつも綺麗に掃除のしてある、寂しい家であったと云う記念の外には、何物も無い。どんな人が住んでいるだろうかと思つたことはたしかにあるようだが、それさえないとも解決がつかなくつた。どうしてもあの窓はいつも障子が締まつていたり、簾が降りていたりして、その奥はひっそりしていたようである。そうして見ると、あの女は近頃外に氣をつけて、窓を開けて自分の通るのを待っていることになつたらしいと、岡田はどうとう判断した。

通る度に顔を見合せて、その間々にはこんな事を思っているうちに、岡田は次第に「窓の女」に親しくなつて、二週間も立つた頃であつたか、或る夕方例の窓の前を通る時、無意識に帽を脱いで礼をした。その時微笑む女の顔がさつと赤く染まつて、寂しい微笑の顔が華やかな笑顔になつた。それから岡田はきまつて窓の女に礼をして通る。

参

岡田は眞初新誌が好きで、中にも大鉄椎伝は全文を誦誦することが出来るほどであつた。それでよほど前から武芸がして見たいと云う願望を持っていたが、つい機会が無かつたので、何にも手を出さずにいた。近年競漕を始めてから、熱心になり、仲間にも推されて選手になるほどの進歩をしたのは、岡田のこの一面の意志が発展したのであつた。

同じ眞初新誌の中に、今一つ岡田の好きな文章がある。それは小青伝であつた。あの伝に書いてある女、新しい詞で形容すれば、死の天使を闇の外に待たせておいて、徐かに脂粉の粧を擬すとも云うような、美しさを性命にしているあの女が、どんなにか岡田の同情を動かしたであろう。女と云うものは岡田のためには、ただ美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持していなくてはならぬように感ぜられた。それには平生香奩体

の詩を読んだり、sentimental な、fatale な、romantic な文章を読んだりして、知らず識らずの間にその影響を受けていたためもあるだろう。

岡田は窓の女に会釈をするようになってからよほど久しくなつても、その女の身の上を探つて見ようと思ひなかつた。無論家の様子や、女の身なりで、丑物だらうとは思つた。しかし別段それを不快にも思わない。名も知らぬが、しいて知ろうと思ひない。標札を見たら、名が分かるだらうと思つたこともあるが、窓に女のいる時は女に遠慮をする。そうでない時は近処の人や、往來の人の目を憚る。とうとう底の蔭になつてゐる小さい木札に、どんな字が書いてあるか見ずにいたのである。

肆

窓の女の種姓は、実は岡田を主人公にしなくてはならぬこの話の事件が過去に属してから聞いたのであるが、都合上ここでざつと話すことにする。

まだ大学医学部が下谷にある時の事であつた。灰色の瓦を漆喰で塗り込んで、基盤の目のようにした壁の所々に、腕の太さの木を堅に並べてはめた窓の明いている、藤堂屋敷の門長屋が寄宿舎になつていて、学生はその中で、ちと氣の毒な申分だが、野獸のような生活をしてゐた。勿論今はあんな窓を見ようと思つたつて、わずかに丸の内の櫓に残っている位のものです、上野の動物園で獅子や虎を飼つておく檻の格子なんぞは、あれよりは遙かにきやんに出来ている。

寄宿舎には小使がいた。それを学生は外使に使うことが出来た。白木綿の兵古帯に、小倉袴を穿いた学生の買物は、大抵きまつてゐる。所謂「羊羹」と「金平糖」とである。羊羹と云うのは焼芋、金米糖と云うのははじけ豆であつたと云うことも、文明史上の参考に書き残しておく価値があるかも知れない。小使は一度の使賃として二銭貰うことになつてゐた。

この小使の一人に末造と云うのがいた。外のは髪かみの栗くりの殻かのように伸びた中に、口がぐり開ひらいているのに、この男はいつも綺麗きれいに刺さった髪かみの痕あとの青い中に、唇くちびるが堅く結むすばれていた。小倉服こくらふくも外そとのは汚きたれているに、この男のはさっぱりしていて、どうかすると唐から棧せんが何かを着て前掛まへかけをしているのを見ることがあった。

僕にいつ誰が始めて噂うわさをしたか知らぬが、金がない時は末造が立て替えてくれると云うことを僕は聞いた。勿論五十銭とか一円とかの金である。それが次第に五円貸す十円貸すと云うようになって、借る人に証文を書かせる、書替かきかへをさせる。とうとう一人前の高利貸になった。一体元手はどうしたのか。まさか二銭の使賃しちんを貯蓄ちそくしたのでもあるまいが、一匹の人間が持っているだけの精力を一事に傾注けいしゆすると、實際不可能な事はなくなるかも知れない。

とにかく学校が下谷から本郷に遷うつる頃には、もう末造は小使ではなかった。しかしその頃池の端へ越して来た末造の家へは、無分別な学生がくせいの出入が絶えなかった。

末造は小使になった時三十を越していたから、貧乏世帯ながら、妻もあれば子もあったのである。それが高利貸で成功して、池の端へ越してから後に、醜みにくい、口やかましい女房をあきたらなく思うようになった。

その時末造が或る女を思い出した。それは自分が練堀ねりぼり町の裏からせまい露地ろでを抜けて大学へ通勤する時、折々見たことのある女である。どぶ板のいつもこわれているあたりに、年中戸が半分締めてある、薄暗い家うちがあって、夜その前を通って見れば、簷下えんかに車のついた屋台が挽き込んであるので、そうでなくとも狭い露地を、体を斜かたにして通らなくてはならない。最初末造の注意を惹いたのは、この家に稽古三味線の音のすることであった。それからその三味線の音の主が、十六七の可哀らしい娘だと云うことを知った。貧しそうな家には似ず、この娘がいつも身綺麗みきれいにして、着物も小ざっぱりした物ものを着ていた。戸口にいても、人が通るとすぐ薄暗い家の中へ引ひつ込んでしまう。何事に

も注意深い性質の末造は、わざわざ探るともなしに、この娘が玉と云う子で、母親がなくて、親爺と二人暮らししていると云う事、その親爺は秋葉の原に館細工の床店を出していると云う事などを知った。そのうちにこの裏店に革命の変動が起った。例の簷下えんかに引き入れてあった屋台が、夜通よとほって見てもなくなった。いつもひっそりしていた家とその周囲とへ、当時の流行語で言うところ、開化と云うものが襲襲ってでも来たのか、半分こわれて、半分はね返っていたどぶ板が張り替えられたり、入口の模様替が出来て、新しい格子戸が立てられたりした。或る時入口に靴の脱いであるのを見た。それから間もなく、この家の戸口に新しい標札が打たれたのを見ると、巡査何の何某と書いてあった。末造は松永町から、仲徒町へ掛けて、色々な買物をして廻る間に、又探るともなしに、館屋の爺いさんの内へ婿入のあった事をたしかめた。標札にあった巡査がその婿なのである。お玉を目の球よりも大切にしていた爺いさんは、こわい顔のおまわりさんに娘を渡すのを、天狗にでも撈かわれるように思い、その婿殿が自分の内へ這入り込んで来るのを、この上もなく窮屈に思おもって、平生心安くする誰彼に相談したが、一人もことわってしまえとはつきり云いってくれるものがなかった。それ見た事か。こちとらがいよいよ世話をしようとするのに、一人娘だから出されぬのなんのと、面倒な事を言いっていて、とうとうそんなことわり憎い婿さんが来るようになったと云うものもある。お前方の方で厭いといのなら、遠い所へでも越すより外あるまいが、相手がおまわりさんで見ると、すぐにどこへ越したと云うことを調べて、その先へ掛け合うだろうから、どうも逃げ果せることは出来まいと、威いすように云うものもある。中にも一番物分りの好いと云う評判のお上さんの話がこうだ。「あの子はあるない器量で、お師匠さんもお出で来そうだと云って褒めておいでだから、早く芸者の下地子にお出でしと、わたしがそう云ったじゃありませんか。一人もののおまわりさんと来た日には、一軒一軒見て廻るのだから、子柄の好いのを内に置くと、いやおうなしに連れて行いってしまいなさる。どうもそう云う方

に見込まれたのは、不運だとあきらめるより外、為方がないね」と云うような事を言つたそうだ。末造がこの噂を聞いてから、やつと三月ばかりも立った頃であつただろう。飴細工屋の爺いさんの家に、或る朝戸が締まつていて、戸に「貸屋、差配松永町西のはずれにあり」と書いて張つてあつた。そこで又近所の噂を、買物の序に聞いて見ると、おまわりさんには国に女房も子供もあつたので、それが出し抜けに尋ねて来て、大騒ぎをして、お玉は井戸へ身を投げると云つて飛び出したのを、立聞をしていた隣の上さんがようよう止めたと言ふことであつた。おまわりさんが婿に來ると云う時、爺いさんは色々の人に相談したが、その相談相手の中には一人も爺いさんの法律顧問になつてくれるものがなかつたので、爺いさんは戸籍がどうなつてゐるやら、どんな届がしてあるやら、一切無頓着でいたのである。巡査が髭を拈つて、手続は万事己がするから好いと云うのを、少しも疑わなかつたのである。その頃松永町の北角と云う雜貨店に、色の白い円顔で腮の短い娘がいて、学生は「願なし」と云つていた。この娘が末造にこう云つた。「本当にたあちゃんんは可哀そうでございますわねえ。正直な子だもんですから、全くのお婿さんだと思つていたのに、おまわりさんの方では、下宿したような積になつていたと云うのですもの」と云つた。坊主頭の北角の親爺がそばから口を出した。「爺いさんも氣の毒ですよ。町内のお方にお恥かしくて、このままにしてはられないと云つて、西鳥越の方へ越して行きましたよ。それでも子供衆のお得意のある所でなくては、元の商売が出来ないと云うので、秋葉の原へは出てゐるそうです。屋台も一度売つてしまつて、佐久間町の古道具屋の店に出ていたのを、わけを話して取り返したと云うことです。そんな事やら、引越やらで、随分掛かつた筈ですから、さぞ困つていますでしょう。おまわりさんが国の女房や子供を干し上げておいて、大きな顔をして酒を飲んで、上戸でもない爺いさんに相手をさせていた間、まあ、一寸菜園居になつた夢を見たようなものですな」と、頭をつつりと撫でて云つた。それから後、末造は飴屋のお玉さんの事を忘

れていたのに、金が出来て段々自由が利くようになったので、ふいと思ひ出したのである。

今では世間の廣くなつてゐる末造の事だから、手を廻して西鳥越の方を尋ねさせて見ると、柳盛座の裏の車屋の隣に、飴細工屋の爺いさんのいるのを突き留めた。お玉も娘でいた。そこで或る大きい商人が妾に欲しいと云うがどうだと、人をもつて掛け合つと、最初は妾になるのはいやだと云つていたが、おとなしい女だけに、とうとう親のためだと云うので、松源で檀那にお目見えをすると云うところまで話が進んだ。

伍

金の事より外、何一つ考えたことのない末造も、お玉のありかを突き留めるや否や、まだ先方が承知するかせぬか知れぬうちに、自分近所の借家を捜して歩いた。何軒も見ただ中で、末造の氣に入つた店が二軒あつた。一つは同じ池の端で、自分の住まつてゐる福地源一郎の邸宅の隣と、その頃名高かつた蕎麦屋の蓮玉庵との真ん中位のところ、池の西南の隅から少し蓮玉庵の方へ寄つた、往來から少し引つ込めて立てた家である。四つ目垣の内に、高野槇が一本とちやば檜葉が二三本と植えてあつて、植木の間から、竹格子を打つた肘懸窓が見えている。貸家の札が張つてあるので這入つて見ると、まだ人が住んでいて、五十ばかりの婆あさんが案内をして中を見せしてくれた。その婆あさんが問はずがたりに云うには、主人は中国辺の或る大名の家老であつたが、廢藩になつてから、小使取りに大藏省の属官を勤めてゐる。もう六十幾つとかになるが、綺麗好きで、東京中を歩いて、新築の借家を捜して借りるが、少し古びて來ると、すぐ引き越す。勿論子供は別になつてしまつてから久しくなるので、家を荒すような事はな

れが厭でならぬので、知らぬ人にも夫の壁訴訟をする。「この内なんぞもまだこんなに綺麗なのに、もう越すと申すのでございますよ」と云って、内じゅうを細かに見せてくれた。どこからどこまで、可なり綺麗に掃除がしてある。末造は一才好いと思つて、敷金と家賃と差配の名とを、手帳に書き留めて出た。

今一つは無縁坂の中ほどにある小家である。それは札も何も出ていなかったが、売りに出たのを聞いて見に行つた。持主は湯島切通しの質屋で、その隠居がついこの間まで住んでいたのが亡くなったので、婆あさんは本店へ引き取られたと云うのである。隣が裁縫の師匠をしているので、少々騒がしいが、わざわざ隠居所に木なんぞを選んで立てたものゆえ、どことなく住心地が好きそうである。入口の格子戸から、花崗石を塗り込めた敲きの庭まで、小ざっぱりと奥床しげに出来ている。

末造は一晚床の上に寝転んで、二つの中どれにしようかと考えた。そばには女房が子供を寐かそうと思つて、自分も一しよに寐入つてしまつて、大きな口を開いて、女らしくない軀をしている。亭主が夜賃金の利廻しを考えて、いつまでも眠らずにいるのは常の事なので、女房は何時まで亭主が目を開いていようが、少しも気になんぞはせぬのである。末造は腹のうちで可笑しくて溜まらない。考へつ女房の顔を見て、こう思つた。「まあ、同じ女でもこんな面をしているのもある。あのお玉は大ぶ久しく見ないが、あの時はまだ子供上がりであつたのに、おとなしい中に意気なところのある、震いつきたいような顔をしていた。さぞこの頃は女振を上げてゐるだらうな。顔を見るのが楽みだな。かかあ奴。平気で寐でけつかる。己だつて、いつも金のことばかり考えてゐるのだと思うと、大違いだぞ。おや。もう蚊が出やがつた。下谷はこれだから厭だ。そろそろ蚊屋を吊らなくちゃあ、かかあは好いが、子供が食われるだらう。」こんな事を思つては、又家の事を考えて見る。どうか、どうか断案に到着したらしく思つたのは、一時過ぎであつた。それはこうである。「あの池の端の家は、人

は見晴しがあつて好いなんぞと云うかも知れないが、見晴しはこの家で沢山だ。家賃が安い、借家となると何やかや手が掛かる。それになんとか開け広げたような場所で、人の目に着きそう。うっかり窓でもあけていて、子供を連れて仲町へ出掛けるかかあにでも見られようものなら面倒だ。無縁坂の方は陰気なようだが、学生が散歩に出て通るより外に、人の余り通らないところになつてゐる。一時に金を出して買うのはおっくうなようだが、木道具の好いのが使つてあるわりに安いから、保険でもつけておけばいつ売ることになつても元値は取れると思つて安心していられる。無縁坂にしよう、しよう。己が夕方にでもなつて、湯にでも行つて、気の利いた支度をして、かかあに好い加減な事を言つて、だまぐらかして出掛けるのだな。そしてあの格子戸を開けて、ずっと這入つて行つたら、どんな塩梅だらう。お玉の奴め。猫か何かを膝にのつけて、さびしがつて待ていやがるだらうな。勿論お作りをして待つてゐるのだ。着物なんぞはどうでもして遣る。待てよ。馬鹿な錢を使つてはならないぞ。質流れにだつて、立派なものがある。女一人に着物や頭の物の贅沢をさせるには、世間の奴のするような、馬鹿をつくさなくても好い。隣の福地さんなんぞは、己の内より大きな構をしていて、数寄屋町の芸者を連れて、池の端をぶらついて、書生さんを羨ましがらせて、好い氣になつていなさるが、内証は火の車だ。学者が聞いてあきれあ。筆尖で旨い事をすりゃあ、お店ものだつてお払箱にならあ。おう、そうそう。お玉は三味線が弾けたつて。爪弾で心意氣でも聞かせてくれるようだと思ひ、駄目だらうな。お笑いなさるからいやだわとか、なんとか云つて、弾けと云つても、なかなか弾かないだらうて。ほんになんにつけても、はにかみやあがるだらう。顔を赤くしてもじもじするに違ひない。己が始て行つた晩には、どうするだらう。」空想は縦横に馳騁して、底止する所を知らない。かれこれするうち、想像が切れ切れになつて、白い肌がちらつく。囁きが聞える。末造は好い心持に寐入つてしまつ

た。そばに上さんは相変らず軒をしている。

陸

松源の目見えと云うのは、末造がためには一の *leté* であつた。一口に爪に火を点すなどとは云うが、金を溜める人にはいろいろある。細かい所に氣をつけて、塵紙を二つに切っておいて使つたり、用事を葉書で済ますために、顕微鏡がなくては読まれぬような字を書いたりするのは、どの人にも共通している性質だろうが、それを絶待的に自己の生活の全範圍に及ぼして、真に爪に火を点す人と、どこかに一つ穴を開けて、息を抜くようにしている人がある。これまで小説に書かれたり、芝居に為組まれたりしている守銭奴は、ほとんど絶待的な奴ばかりのようである。活きた、金を溜める男には、實際さうでないのが多い。吝な癖に、女には目がないとか、不思議に食奢だけはするとか云うのがそれである。前にもちょっと話したようであつたが、末造は小綺麗な身なりをするのが道楽で、まだ大学の小使をしていた時なんぞは、休日になると、お定まりの小倉の筒袖を脱ぎ棄てて、氣の利いた商人らしい着物に着換えるのであつた。そしてそれを一種の楽しみにしていた。学生どもが稀に唐棧ずくめの末造に邂逅して、びっくりすることのあつたのは、こうしたわけである。そこで末造には、この外にこれと云う道楽がない。芸妓なんぞに掛かり合つたこともなければ、料理屋を飲んで歩いたこともない。蓮玉で蕎麦を食う位がすでに奮発の一つになつていて、女房や子供はよほど前まで、こう云う時連れて行つて貰うことが出来なかつた。それは女房の身なりを自分の支度で吊り合うようにはしていなかつたからである。女房が何かねだると、末造はいつも「馬鹿を言うな、手前なんぞは己とは違ひ、己は附合があるから、為方なしにしているのだ」と云つて撥ねつけたのである。その後大ぶ金が子を生んでからは、末造も料理屋へ出這入することがあつたが、これはお勢の寄り合う時に限つていて、自分だけが客になつて行くのではなかつた。それがお玉に目見えをさせると

云うことになつて、ふいと晴がましい、soignée な心持になつて、目見えは松源にしようといひ出したのである。

さていよいよ目見えをさせようとなつた時、避くべからざる問題が出来た。それはお玉さんの支度である。お玉さんのばかりなら好いが、爺いさんの支度までして遣らなくてはならないことになつた。これには中に立つて口を利いた婆あさんもすこぶ窮したが、爺いさんの云うことは娘が一も二もなく同意するので、それをして抑えようとすると、根本的に談判が破裂しないにも限らぬと云う状況になつたから為方がない。爺いさんの申分はざつとこうであつた。「お玉はわたしの大事な一人娘で、それも余所の一人娘とは違つて、わたしの身よりと云うものは、あれより外には一人もない。わたしは亡くなった女房一人をたよりにして、寂しい生涯を送つたものだが、その女房が三十を越しての初産でお玉を生んでおいて、とうとうそれが病附で亡くなつた。貫乳をして育てていると、やつと四月ばかりになつた時、江戸中に流行つた麻疹になつて、お医者が見切つてしまつたのを、わたしは商売も何も投遣にして介抱して、やつと命を取り留めた。世間は物騒な最中で、井伊様がお殺されなすつてから二年目、生麦で西洋人が斬られたと云う年であつた。それからと云うものは、店も何もなくなつてしまつたわたしが、何遍もいっその事死んでしまおうかと思つたのを、小さい手でわたしの胸をいじつて、大きい目でわたしの顔を見て笑う、可哀いお玉を一しよに殺す氣になれないばかりに、出来な

い我慢をして一日一日と命を繋いでいた。お玉が生れた時、わたしはもう四十五で、おまけに苦勞をし続けて年より更けていたのだが、一口は食えなくても二人口は食えるなどと云つて、小金を持った後家さんの所へ、入婿に世話をしよう、子供は里にでも遣つてしまえと、親切に云つてくれた人もあつたが、わたしはお玉が可哀さに、そつてもなくことわつた。それまでにして育てたお玉を、貧すれば鈍するやら云うわけで、飛んだ不実な男の慰物にせられたのが、悔やしくて悔やしくてならないのだ。為合せな事には、好い娘だと人も云つて